

〈研究ノート〉

「若者論」論*

難 波 功 士**

【0】はじめに

前稿で指摘したように（難波，2004）、新聞見出しにおける「青年」の語の使用回数は、戦後一貫して横ばいないし微減しているのに対し、「若者」は70年代以降爆発的に頻出している（中野，1987c；阪本，2000）。また、「青年文化」というキーワードで文献を検索してみても、戦前の「青年文化全集（潮文閣）」「勤労青年文化叢書（東洋書館）」が多くヒットし、戦後は青年心理学関連のものなどが若干拾えるだけなのに対し、「若者文化」では、70年代以降に出版された多くの書籍がリストアップされてくる。要するに、60年代にベビー・ブーマーたちが全世界的にひきおこした Youthquake のインパクトによって、大人社会へと速やかに社会化されない「ユース」たちと、それらがシェアするユース・カルチャーの存在が世に知られるようになり、日本社会においても、「若者（文化）」の語が浮上・定着していったのである。本稿では、青年論・若者論の変遷を追うことで、戦後日本社会における若者概念の（再）構築ないし変化の過程を辿り、各時代の若者文化とその下位分類であるユース・サブカルチャーズ（以下YSと略記）のあり方を振り返っておきたい。

【1】青年文化から
＜若者文化（Youth Culture）＞へ

議論の混乱を避けるために、まず青年文化と若者文化の語の定義を検討しておこう。これまでの諸説を整理すると、以下の4パターンにまとめられる（柴野，1981）。

①「青年文化≡若者文化」説

「若者が特異な風俗や嗜好を表立って誇示し、時におとな世代からは病症として感じとるような行動をとり、「脱文化」的文化を主張するようになった今日的な若者の姿を、一応「若者文化」とするならば、日本にそれがいつごろから明確化してきたのであろうか。／右のような意味の「若者文化」の本格化は、およそ一九六〇年代の中ごろからと考えられる。…ここで青年文化については、青年の行動様式一般を表現する広義のそれと、右にみてきたような、いわゆる「若者文化」と限定して語るべき、青年によって創造された、青年にとって独自の文化、つまり狭義の青年文化に分けてとらえておく必要がある」（松原，1977：6-11）

②「青年文化⊃若者文化」説

「産業革命がもたらした急激な社会変化は職住の分離、都市化、頻繁な社会移動等を進展させ、子供と大人の活動する世界を分断した。ここでは移行自体が危機的状況となる。…つまり「青年期」という概念は、すぐれて社会—歴史的に限定された概念なのである。…そこでの青年固有の価値観と行動様式は「青年文化」（adolescent culture）と呼ばれるようになる。これは、子供から大人の移行が連続的か非連続的かを問わず当該社会の該当する若者に適用される価値観と行動様式である「若者文化」（youth culture）の一部、すなわち経済的分業、技術的専門化、教育期間の延長などが進む産業社会における「若者文化」である」（高田，1994：217）

③「青年文化≠若者文化」説

「一九六〇年代の若者の文化は、消費文化を主とする「若者文化」と、対抗文化を主とする「青年

*キーワード：若者文化、青年文化、世代

**関西学院大学社会学部助教授

文化」の二つの要素から構成されていた」(溝上, 2004: 87) といった、両者間に質的な差異を見ながらもその共存を指摘する議論など¹⁾。

④「青年文化→若者文化」説

「マンガ文化圏の主役は若者であった。もはや大人の仕組んだ仕掛けの中で大人によって作られ、若者が与えてもらう文化ではなかった。60年代の若者文化の特徴というか、60年代に若者文化ということばを使わざるをえなくなる所以というか、それは、この自前性、もしくは自立性であった。社会学の用語に青年文化というのがある。青春期にいるというか、一人前の社会人になる直前の年代に固有の行動様式と社会人になるための広義の基礎トレーニングを意味している。青年文化は、したがって通過的であり、青年自身が創造するわけではなく(すでにある定型化したものを社会が与える)、全体(成人)文化に従属している。今

でも青年文化ということばが使われているけれど、60年代のこのマンガ文化のいうならば確立は、青年文化の意味・意義を希薄化し消滅させた」(中野, 1997: 88)²⁾。

冒頭でも述べたように、本稿では④、すなわち社会全体での「青年(文化)から若者(文化)への移行」という立場をとりたい。なぜならば、語の folk use の変遷に素直に従うことで、その背後にある、そう呼ばざるを得ない社会的な変容をより鋭く感受できると考えたからである³⁾。

もちろん、一口に「若者(文化)」といっても、そこにはさまざまな含意が、その時々にくめられている。60~70年代の若者(文化)に関する議論をサーベイしただけでも、①逸脱(松原, 1977)、②対抗(文化)(中野, 1984; 平野, 1985)、③いわゆるサブカルチャー(中野, 1987a)⁴⁾、④情念

- 1) 青年文化を adolescent culture の訳語、若者文化を youth culture の訳語と考えるならば、ケネス・ケニストンの言うように、60年代の adolescent でもなく adult でもない人々の広範な出現により、「ユース」というライフ・ステージが定着したのである。それはエリクソンの「引き延ばされた青春期」や「引き延ばされた心理社会的猶予期間」といった概念では、もはや補足しえなくなった現実の反映であった(Keniston, 1971=1977)。このように青年文化と若者文化との間に、成長段階に対応した差異を見る議論もこのカテゴリーに分類できよう(宮本, 2004)。筆者の「青年文化」のとらえ方は、高田昭彦の言う青年文化の三類型中の一つである「支配的文化(dominant culture)の一部を構成しそれに組み込まれた「部分文化」(高田, 1996)、ないしは二関隆美の青年文化三類型中の「青年役割文化」にほぼ等しい(二関, 1975)。
- 2) 同様の指摘として「このように学校の格差やタイプなどによる分化が弱まりつつあるなかで、生徒たちは「若者」としての側面を強め、若者文化との関わりにおいて分化するようになってきた。学校での生活は長期化する一方で、社会エージェントとしての役割は弱まりつつある。それに代わって、メディアや都市の消費空間へのコミットが全体的に増大し、彼らはそれとの関わりにおいて自らを定位する度合いが高まってきた。「青年」よりも「若者」としての側面の優位である」(伊藤, 2002: 93)。若者文化への移行にポジティブな意味づけをする議論としては、より官製である「青年」にはない「やさしさ」(栗原, 1981)や「あたたかみ」(森, 1980)、文化的主体としての女性の台頭(海老坂, 2004)をそこに読み込むものなど。また83年に同じシンクタンクから出された二つの報告書が、都市の若者文化と地方の青年文化という対比を見せているのも興味深い(総合研究開発機構, 1983a・1983b)。なお、青年と若者の民俗学的・歴史学的検討として、大日本聯合青年団, 1936; 桜井, 1952; 中山, 1956; 佐藤, 1970; 天野, 1978; 平山, 1978; 竹内, 1991; 岩田, 1996; 川村, 2000; 稲垣, 2002; 中根, 2004など。
- 3) 筆者の立場は青年文化≠若者文化であり、かつ青年文化→若者文化であるが、もちろん青年文化の現存を否定するつもりはない。学校文化論の一つの興味深い展開である「上層: 生徒文化・下層: 若者文化モデル試論」(大和多, 2001)のように、青年文化(≒生徒文化)は、依然ある種の若者(たちのある側面)にとっては有意義なものである。また、青年文化→若者文化の移行は、児童文化→子ども文化の過程と同型的なものであろう(藤本, 1983; 日本子ども社会学会, 1999)。
- 4) たしかに、1992年10月9日号『宝島』の特集「若者文化(サブカルチャー)の基礎知識」に見られるように、「若者文化=サブカルチャー」といった folk use も存在する。また、71~72年に『YTV レポート』誌に連載された特集「サブカルチャーのメイン化」シリーズに見られるように、本稿で言うところの<若者文化>=サブカルチャーとする議論もあるが(日向, 1973)、前々稿に述べたように(難波, 2003)、筆者は「サブカルチャー≒若者文化≒YS」という立場をとる(深作, 1975)。また、「どの世代の青春時代にもあるように、ある種の文化や芸術に対して自分だけがのめり込んでいるという選民意識の対象全般をサブカルチャーと呼ぶなら、六〇年代も八〇年代もサブカルチャーは同じ意味を持つ」(高平, 2004: 22)がゆえに、東浩紀の「コミック、アニメ、ゲーム、パーソナル・コンピュータ、SF、特撮、フィギュアそのほか、たがいに深く結びついた一群のオ

・感覚重視（赤塚，1969）、⑤遊び（井上，1971）、⑥モラトリアム（小此木，1978）、⑦流動的な自己（藤竹，1972；栗原，1994）⁵⁾、⑧消費（文化）（新井，2002）、⑨私化（片桐，1985）、⑩メディア（平野・中野，1975）、⑪世代（岩間，1995）、⑫都市（総合研究開発機構，1983a）、⑬高学歴化（日本経済新聞社，1972）、⑭マーケット（川上，1972）など、さまざまな側面に力点を置いて語られてきた。

ここでは60年代において、いわゆる団塊の世代を中心に、大人世代ないし社会全体への異議申し立て、ないしそこからの離脱を指向したさまざまな文化的実践——都市・メディア・感性・遊び・翻身などをキーワードとした——を、固有名詞としての〈若者文化（Youth Culture）〉と表記しておく⁶⁾。次節では、60年代において unconventional かつ salient であった〈若者文化〉が、普通名詞としての若者文化に転化していく過程を概観したい。

【2】「ヤング」と若者文化（youth culture）

70年代に入ると、今度は青年でも若者でもない、「ヤング」という呼称が急速に浮上してくる（坂田，1979）。

「もちろん、15～22歳くらいの年齢層の若者は常に存在していた。ただ彼らが社会にとって見慣れぬ存在として出現するとき、単に学生とか若者とかいうニュートラルな言葉ではなく、新しい呼称が与えられる。たとえば明治時代初期に Young

Men の訳語として登場した「青年」、昭和初期の「モボ・モガ」、戦後の「ティーンエイジャー」などだ。「ヤング」が登場するのは学園紛争直後の1970年（昭和45年）である。／学園紛争時の若者は社会に「反抗」した。欧米でいう Young Radicals とか Young Power はむしろこういうタイプの若者を指していたが、日本で使われ始めたカタカナの「ヤング」は、紛争後シラケてしまった若者を指した。大人社会にしてみれば反抗する Young Power も驚異だが、シラケて体制から逸脱しだした「ヤング」はもっとわけがわからない。70年代の初頭に15～25歳の層を「ヤング」と呼ぶ言い方は、マスコミでアツという間に普及する。当時のヤング談義には紛争時の若者のほうがまだしも理解できた、というようなトーンがある⁷⁾」

このヤングの特性に関して、藤竹暁は「背伸びをしない／他者志向型／現実的／同輩集団やマスコミの影響力の強さ」などを指摘している（藤竹，1972）。また72年10月8日付『朝日新聞』の特集記事「サラリーマン生態学②ヤング」は、「味気ないな「仕事即人生なんて」…／成長万能主義に背／定年まで「22%」／馬車馬お断り」といった小見出しを挙げ、ヤングたちのコミットメントの低さを嘆いている⁸⁾。

その一方で、大人ないし社会の側は、マーケットないしコンテンツの受け手として「ヤング」たちの編成も試みてきた。たとえば、テレビ番組のタイトルを見ただけでも、TBSの『ヤング720』『ヤングジャンボリー』（いずれも66年放送開始）

タク系文化]=サブカルチャーという議論も、自己の経験の特権化のように思われる（東，2001）。そうした何らかのコンテンツ群をサブカルチャーと等置し、その分析を専らとするサブカルチャー論（宮台ほか，1993；仲川，2002など）に与することはできないし、「若者主導によるサブカルチャー文化の多極的展開」（稲増，2003：62）といった混乱を見逃すわけには行かない。

- 5) 社会学の領域でピーター・バーガーらによって指摘されてきた、アイデンティティの流動化・細分化・自己詮索化・個人化といった現代社会の側面は、プロメテウスの人間（Lifton，1969=1971）やシゾイド人間（小此木，1980）として概念化されてきた。小此木啓吾以降、加賀乙彦・笠原嘉・野田正彰・大平健・福島章・香山リカ・斎藤環など、精神分析医が若者論——特に病理現象としての——の論じ手として浮上していった（加賀，1974；笠原，1977；野田，1987；大平，1990；福島，1991；斎藤，2001；香山，2002）。
- 6) たしかに山田真茂留の言うように〈若者文化〉は融解した（山田，2000）。しかし、それをもって若者文化の終焉とすることはできない（伊奈，2004）。
- 7) 84年7月号『アクロス』の特集「現代若者論——のり子とサメ男の時代」、6頁。
- 8) 同様に72年5月21日号『サンデー毎日』は特集「現代ヤング論」を組み、その「シラケ」ぶりを批判している。また当時三越社長であった岡田茂によるマーケットとしての「ヤング論」を載せている。なお、現在「ヤング」は、「消えゆく流行語」の第6位にランクされている（大迫，2004）。

を皮切りに、『ヤングおー！おー！』（朝日放送、69年）のヒット以降、『ポップヤング』（テレビ朝日、70年）『リブ・ヤング』（フジテレビ、72年）『歌え！ヤンヤン！』（テレビ東京、72年）『レッツゴーヤング』（NHK、74年）、またラジオでは『ABCヤングリクエスト』（朝日放送、66年）『歌え！MBSヤングタウン』（毎日放送、67年）『セイ！ヤング』（文化放送、69年）『ヤングタウン東京』（TBS、69年）と枚挙に暇がない。

60年代は多くの分派を内包しつつも、＜若者文化＞は当該社会においてサブであり、マージナルであり、時にカウンターであり、アンダーグラウンドであり、オルターナティブであった。だがそれも、70年代には徐々に全体社会の中に定着し、日常化し、普通名詞の若者文化へと回収されていく。暴走族のような例を除き、若者文化は、若者が自ら生み出した文化というよりは、社会が若者のために用意した文化という側面を色濃くしていったのである（松原、1974）⁹⁾。

【3】「新人類」以降のYS

80年代に入るとヤングは死語となるが、60年代に始まる若者たちの「私生活中心主義／メディア親和性／娯楽・消費志向／現実主義／延長されたモラトリアム期」等の傾向にはいっそうの拍車がかかる（NHK世論調査部、1986；NHK放送文化調査研究所、1987）。そして、83年6月号『アクロス』誌が「今、新人類たちが時代を先導する」

という特集を組み¹⁰⁾、84年7月1日号『INFAS』が「新人類誕生」を巻頭に掲げ、85年4月19日号『朝日ジャーナル』誌上で「筑紫哲也の若者探検新人類の旗手たち」シリーズがスタートしたことから、60年以降生まれの若者たちへの新たな呼称である「新人類」が、86年の流行語大賞金賞となるなど、新人類現象が広がっていく（中野、1987b；成田、1987；藤竹、1989；新井ほか、1993）¹¹⁾。だがその新人類も、86年暮れには「恥ずかしいフレーズ」扱いされ始めており、「今度営業部に配属された新人類の山田くんです。ま、われわれ旧人類とはちょっとオツムの構造が違うらしい。な、山田君、ハハハハ……」／こういう困ったノリのオッサンがキミたちの職場にも必ず1人はいることと思う。TVのバラエティ番組で愛川欽也とかが使い出したら、流行語の生命も終わったと見て良いだろう」（泉、1988：78）と揶揄されたりもしている¹²⁾。

この新人類と呼ばれた人々に関して注目すべきは、＜若者文化＞の担い手であった団塊の世代やそれに続く「ヤング」たちに比して、同じ年代ないし世代にあることよりも、同じ趣味（taste）を共有していることの方に、重きをおいた点である。アクロス編集部は、それを「一億総ヤング社会」を背景とした「タコツボ分（文）化」と呼び¹³⁾、80年代を通じて「アイビー／プレッピー／ハマトラ／JJ／ニューウェイブ／竹の子／ウエストコースト／50's」→「ディスコ／太眉マヌカン／宝島／オリーブ／セラーズ」→「アメカジ／

- 9) 現在の若者にとって、すでに所与のものとして若者文化がある点に関し、切通理作は、講師を勤めた和光大学での文章教育を通じて、「それは彼らにとって**若者文化を自分たちの文化にしていく**ことでもある。出来上がったカルチュラル・スタディーズとしてではなく、自分たちが捉えられるようになれば、その時に初めてポップカルチャー、サブカルチャーが文化になるのではないかと思う」（切通、2003：338）と述べている。
- 10) この『アクロス』がマーケティング情報誌であったことからわかるように、80年代以降、マーケットとしての若者論・世代論が主流を占めるようになり、そこに精神分析的若者論やメディア論的若者論の系譜も収斂されていくことになる（博報堂生活総合研究所、1985・1994；成田、1986；小此木、1987；大橋、1988；橘川、1990；武田、2002など）。
- 11) 新人類という語は、ヒッピー・ムーヴメントの頃からあるが（末永・中村、1971）、82年10月号『アクロス』「戦後映像メディアの変遷」など今日的な意味での初出は82年頃であり（藤竹、1982）、世に定着したのは85年のことであった（アクロス編集室、1985；浦、1985；野々村、1985；吉成、1985；筑紫、1985）。
- 12) 新人類の登場による、「青年ないし若者／大人（成人）」という区別の最終的な崩壊に関しては、片桐、1996；三浦、1997；河北新報社学芸部、2004など。この時期の新人類談義は、溝上慎一言うところの「アウトサイドインからインサイドアウトへ」という若者たちの意識の変化に対する（溝上、2004）、大人たち（とりわけ企業人）の違和感の表明であった（新人類研究会、1986；守谷、1986；津田、1987；角間、1987；根本、1987；東レファッション企画部、1987；小林、1987；扇谷、1987；岩崎、1988）。
- 13) 81年2月号『アクロス』の特集「現代若者風俗大研究：《タコツボ》カタログ」が初出。

シブカジ／ボディコン／山の手／少年アリス」というタコソボ群の変遷（新種の発生による既存種の駆逐ないしは併存）があったことを指摘している（アクロス編集室，1989）。

<若者文化>が若者文化となり、その若者文化の中にさまざまな分派（clique）が発生し、若者というだけでは自らのアイデンティティを担保し得なくなった70～80年代を経て、既存の社会の中に「飛び地（enclave）」であるYS——しかもそのユースの年齢幅は極端に広がっていく——が並立し始め、かつそれぞれのYSへの関与は、よりアドホックなものへと流動化していき、いわば個人のレヴェルにおいても社会のレヴェルにおいても、サブカルチャーズとアイデンティティーズの時代へと突入していったのである¹⁴⁾。

【4】おわりに

以上、<若者文化>の時期に「対抗文化≒若者（青年）文化≒サブカルチャー≒ポピュラー（ないしポップ）カルチャー」が成立し、その代表的なコンテンツとしてマンガ・テレビおよびラジオ番組・ロックミュージック・若者向け雑誌・ファッション・ニューシネマ・小劇場演劇などがあったことが、その後の概念の混乱と、「文化（way of life）」をなんらかのコンテンツへと実体化・矮小化する傾向を生んだのではないかという問題意識から、若干のサーベイと整理を試みてみた。

かつて標榜された青年社会学（豊澤・平澤，1953；松原，1971；濱島，1973；松本，1977；大野，1983；岩見，1993）は、若者概念の台頭とその拡散を前に、現在では青年心理学や教育社会学

（内の学校文化論や逸脱の社会学）にその残滓を見るだけだが、「若者」の語が使用され続けている以上、またしばらくはそれにとって代わる語が現れる気配のない以上、より広範な領域に目配りした「若者社会学」（富田・藤村，1999）が構想されるべきであろう。本稿は、その中に自身のYS研究を位置づけていくための予備的な作業にあたる。

参考文献

- アクロス編集室編 1985『感性差別化社会へ向けて：新人類がゆく。』PARCO 出版
 1989『東京の若者』PARCO 出版
 赤塚行雄 1969『ゲバ・アン辞典』自由国民社
 天野武 1978『若者組の研究』柏書房
 新井克弥 2002「ディスクールとしての若者文化」林茂樹編『情報化と社会心理』中央大学出版部
 新井克弥ほか 1993「虚構としての新人類論」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社
 東浩紀 2001『動物化するポストモダン：オタクから見た日本社会』講談社現代新書
 Berger, Peter et al. 1974 "The Homelessness Mind", = 1977 高山真知子ほか訳『故郷喪失者たち』新曜社
 文化放送 1976『若者たちの日曜日』文化放送営業局業務部
 筑紫哲也 1985『新人類論』朝日出版社
 大日本聯合青年団編 1936『若者制度の研究』日本青年館
 海老坂武 2004『かくも激しき希望の歲月 1966～1972』岩波書店
 藤本浩之輔 1983「子ども文化の変容に関する研究」『京都大学教育学部紀要』29
 藤竹暁 1972『シラケ時代の文化論』学芸書林
 1982「テレビ新人類とつきあう法」『中央公論』1146
 藤竹暁編 1989『現代のエスプリ265：若者は、いま』至文堂

14) <若者文化>が、若者（青年）文化形成の軸が「階級」から「世代」へと移動したことを端的に示したとするならば（宮台ほか，1993）、80年代以降のYSは、世代よりも知識や趣味の共有が重視されていく傾向を示している。「今回実施したアンケート調査の結果でも、若者の仲間意識は特に年上に対して寛容で、多くは一〇歳くらい年上まで、さらに少なからぬ部分はそれ以上までも同世代として認めようという傾向が現れていた。…これらのものにとっては、生活行動自体やそれを規定する情報の共通性にこそ、同世代意識を決定する要因であり、年齢と世代が必ずしも結びつかないものにあっているとも考えられる」（総合研究開発機構，1983a：126）。そして現在、01年8月29日号『SPA!』の特集「オッサンと若者の境界線はどこにある？」に見られるように、若者期は30才まで延長され、かつその「境界線」は、服の着こなしのセンスや本人の意識の持ち方など、判然としない雰囲気のようなものでしかない。もちろん今日においても、YSが、強固なアイデンティティ形成に結果する場合もある（新谷，2002）。しかし、たとえば86年3月21日号『anan』が、「アンアン vs. JJ」と題して特集を組み、双方（読者）の差異・対立の構図を明確化したような、特定のYSへの強固なコミットメントは、現在広範には見うけられない。

- 深作光貞 1975「世界のサブカルチャー」『思想の科学』254
- 福島章 1991『イメージ世代の心を読む』新曜社
- 博報堂生活総合研究所編 1985『若者：感性時代の先導者たち』博報堂生活総合研究所
1994『調査年報1994：若者』博報堂生活総合研究所
- 濱島朗編 1973『現代青年論』有斐閣
- 早坂泰次郎 1971『現代の若者たち』日経新書
- 平野秀秋 1985『対抗文化の本質と現実』『青年心理』53
- 平野秀秋・中野収 1975『コピー体験の文化』時事通信社
- 平山和彦 1978『青年集団史研究序説(上)(下)』新泉社
- 日向あき子 1973『ポップ文化論』ダイヤモンド社
- 伊奈正人 2004「団塊世代若者文化とサブカルチャー概念の再検討」『東京女子大学社会学会紀要』32
- 稲垣恭子 2002「若者文化における秩序と反秩序」稲垣恭子・竹内洋編『不良・ヒーロー・左傾』人文書院
- 稲増龍夫 2003『パンドラのメディア』筑摩書房
- 井上俊 1971「青年の文化と生活意識」『社会学評論』22-2
- 石川弘義 1978『仮性成熟の時代』徳間書店
1989『欲望の戦後史』廣済堂出版
- 伊藤茂樹 2002「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』70
- 岩間夏樹 1995『戦後若者文化の光芒：団塊・新人類・団塊ジュニアの軌跡』日本経済新聞社
- 岩見和彦 1993『青春の変貌：青年社会学のまなざし』関西大学出版部
- 岩崎隆治 1988『職場と若者たち：新人類の活かし方』日本労働協会
- 岩田重則 1996『ムラの若者・くにの若者』未来社
- 泉麻人 1988『街のオキテ』新潮文庫
- 加賀乙彦 1974『現代若者気質』講談社現代新書
- 河北新報社会学芸部編 2004『大人になった新人類：三十代の自画像』勁草書房
- 角間隆 1987『「新人類」学入門：第二BB世代の精神分析』MG出版
- 菅野拓也 1981『現代若者文化考：コミック・イメージソング・深夜放送 etc』築地書館
- 笠原嘉 1977『青年期』中公新書
- 片桐雅隆 1985「若者・都市・私化」『都市問題研究』37-2 (410)
- 片桐新自 1996「「新人類」は今：「大人」になりきれない「若者」たち」『関西大学社会学部紀要』28-1
- 川上宏 1972『綠色市場』ビジネス社
- 川村邦光 2000『<民俗の知>の系譜』昭和堂
- 香山リカ 2002『若者の法則』岩波新書
- Keniston, Kenneth 1971 "Youth and Dissent", =1977 高田昭彦ほか訳『青年の異議申し立て』東京創元社
- 橘川幸夫 1990『一応族の反乱：若者消費はどこへゆく?』日本経済新聞社
- 切通理作 2003『ポップカルチャー若者の世紀』廣済堂
- 小林克己 1987『新人類との交際術』マネジメント社
- 栗原彬 1981『やさしさのゆくえ=現代青年論』筑摩書房
1994『人生のドラマトルギー』岩波書店
- Lifton, Robert 1969 "Boundaries" =1971外林大作訳『誰が生き残るか：プロテウスの人間』誠信書房
- 前田由紀 1985「アメリカの若者のダンスに関する一考察：青年文化の再評価」『人間研究』29
- 松原治郎 1971『現代の青年』中公新書
1974『日本青年の意識構造』弘文堂
1977「青年文化論」松原治郎・岡堂哲雄編『現代のエスプリ別冊：青年3文化と生態』至文堂
- 松本良夫 1977「青年期の社会学」松原治郎・岡堂哲雄編『現代のエスプリ別冊：青年1 現代的状況』至文堂
- 三浦展 1997『新人類、親になる!』小学館
- 宮台真司ほか 1993『サブカルチャー解体神話』パルコ出版
- 宮本みち子 2004『ポスト青年期の親子戦略』勁草書房
- 溝上慎一 2004『現代大学生論』NHK ブックス
- 森清 1980『怒らぬ若者たち』講談社現代新書
- 守谷雄司 1986『頭のいい新人類操縦法』第一企画出版
- 仲川秀樹 2002『サブカルチャー社会学』学陽書房
- 中根隆行 2004『<朝鮮>表象の文化誌』新曜社
- 中西新太郎 2004『若者たちに何が起きているのか』花伝社
- 中野収 1984『ナルシスの現在』時事通信社
1987a『現代史の中の若者』三省堂
1987b『会社にエイリアン異星人がやって来た!：新人類現象を読む』講談社
1987c『若者文化術語集』リクルート出版
1996「若者像の変遷」井上俊ほか編『ライフコースの社会学』岩波書店
1997『戦後の世相を読む』岩波書店
- 中山太郎『日本若者史』日文社、1956年(初版は1930年)
- 難波功士 2003「ユース・サブカルチャー研究における状況的パースペクティブ」『関西学院大学社会学部紀要』95
2004「戦後ユース・サブカルチャーズについて(1)」『関西学院大学社会学部紀要』96

- 成田康昭 1986『「高感度人間」を解説する』講談社現代新書
1987「社会現象としての「新人類」」『青年心理』62
- 根本孝 1987『新人類 vs 管理者』中央経済社
- NHK放送文化調査研究所編 1987『情報・社会・人間』日本放送出版協会
- NHK世論調査部編 1986『日本の若者』日本放送出版協会
- 日本経済新聞社編 1972『高学歴社会の若者たち』日本経済新聞社
- 日本子ども社会学会編 1999『いま、子ども社会に何がおこっているか』北大路書房
- 二関隆美 1975「青年文化の問題：青年社会学のための序説」『大阪大学人間科学部紀要』1
- 西平直喜編 1970『現代青年の意識と行動1 拒絶と社会参加』大日本図書
- 野田正彰 1987『コンピュータ新人類の研究』文藝春秋
- 野間宏 1967『青年の問題 文化の問題』合同出版
- 野々村文宏 1985『新人類の主張』駸々堂
- 扇谷正造編 1987『新人類がやってきた!』PHP研究所
- 小此木啓吾 1978『モラトリアム人間の時代』中央公論社
1980『シゾイド人間』朝日出版社
1987『一・五の時代』筑摩書房
- 大野道夫 1983「青年社会学のための研究ノート」『東京大学教育学部紀要』23
- 大橋照枝 1988『世代差ビジネス論』東洋経済新報社
- 大平健 1990『豊かさの精神病理』岩波書店
- 大迫秀樹 2004『消えゆく日本の俗語・流行語辞典』東邦出版
- 大多和直樹 2001「「地位欲求不満説」再考」『犯罪社会学研究』26
- 寒河江善秋 1959『青年団論』北辰堂
- 斎藤耕二 1996『異文化体験の心理学：青年文化から異文化体験まで』川島書店
- 斎藤環 2001『若者のすべて』PHPエディターズ・グループ
- 阪本博志 2000「戦後日本における「勤労青年」文化」『京都社会学年報』8
- 坂田稔 1979『ユースカルチャー史』勁草書房
- 桜井庄太郎 1952『日本青年史』大蔵省印刷局
- 佐藤守 1970『近代日本青年集団史研究』お茶の水書房
- 柴野昌山 1981『現代の青年』第一法規出版
- 新人類研究会編 1986『新人類読本』日本能率協会
- 新谷周平 2002「ストリートダンスからフリーターへ：進路選択プロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71
- 総合研究開発機構編 1983a『若者と都市』学陽書房
1983b『地方都市青年層のライフスタイルと文化行動』総合研究開発機構
- 末永蒼生・中村政治編 1971『ウルトラ・トリップ』大陸書房
- 高田昭彦 1994「サブカルチャーとネットワーク」庄司興吉・矢澤修次郎編『知とモダニティの社会学』東京大学出版会
1996「日本の青年文化の現状と暴力」『成蹊大学文学部紀要』31
- 高橋勇悦・藤村正之編 1990『青年文化の聖・遊・俗』恒星社厚生閣
- 高平哲郎 2004『ぼくたちの七〇年代』晶文社
- 鷹野良宏 1992『青年学校史』三一書房
- 武田徹 2002『若者はなぜ「繋がり」たがるのか』PHP研究所
- 竹内利美 1991『ムラと年齢集団』名著出版
- 富田英典・藤村正之編 1999『みんなほっちの世界』恒星社厚生閣
- 東レファッション企画部編 1987『新人類学レッスン』学生社
- 豊澤登・平澤薫 1953『青年社会学』朝倉書店
- 津田真澄 1987『新世代サラリーマンの生活と意見：「団塊の世代」から「新人類」まで』東洋経済新報社
- 浦達也 1985『新人類を読み解くキーワード』駸々堂
- 渡部真 2002『ユースカルチャーの現在』医学書院
- 山田真茂留 2000「若者文化の析出と融解」宮島喬編『講座社会学7文化』東京大学出版会
- 吉成真由美 1985『新人類の誕生』TBSブリタニカ
- 依田新ほか編 1972『現代青年の社会参加』金子書房

Rethinking Discourses Concerning the Youth

ABSTRACT

Before the 1960s, in Japanese society young people were usually called 'Seinen'. But, from the 1970s they have been usually called 'Wakamono'. In this paper, I intended to describe the changes of names for the young and think about why such changes happened. My findings include three points. 1) In the 1960s, Youth Culture (Wakamono-Bunka) spread all over the world and in Japan adolescent culture (Seinen-Bunka) was taken over by Wakamono-Bunka which was more anti-authoritarian and hedonistic. 2) In the 1970s, Youth Culture was diluted and diffused. It became more docile and consumption-oriented. As it were, Youth Culture as a unique noun was transformed into youth culture as a common noun. In Japan the youth who liked such youth culture were called 'Yangu' and their personalities were considered more realistic and privatistic. 3) In the 1980s, in Japan the youth had begun to be called 'Shin-Jinrui', which means 'new type of human being'. They were familiar with various media and didn't have the consciousness of belonging to the same age group or generation. They were fragmented into many cliques depending on their interest and taste. Through these processes, Seinen (-Bunka) became a dead word, and simultaneously Youth Culture (Wakamono-Bunka) lost its original ideas linked to a certain generation and period.

Key Words: Youth Culture, adolescent culture, generation